

<エッセイ>

医者とアイドル、二つの夢の先に

Beyond the Two Dreams: A Doctor and an Idol

北村舞香/まいかび先生

Maika Kitamura

I. 二つの夢

私は、二つの夢を持ってしまった。憧れてしまった。

それが、たまたま医者とアイドルだった。

医師として働きながらアイドル活動続ける人は、これまでのアイドルの歴史の中で、ほとんどいなかったのではないだろうか。そもそも需要がなかったのかもしれない。そして、医師という職業の特性を考えても、アイドルとの両立は決して簡単ではない。実際に活動を続けていると、「面白いですね」「すごいですね」といった前向きな言葉ばかりではなく、その両立の難しさを突きつけるような声が、嫌というほど耳に入ってくる。

医者としての私には、「医師として世間の役に立ってください。」と言われる。

一方で、アイドルとしての私には、「お小遣い稼ぎでアイドルをしているのですか？」
「医者と名乗らないと注目されないアイドルですよ。」そんな言葉が向けられる。

正直に言えば、その声は極端なものばかりではない。むしろ、そう思われても仕方がない部分があることを、私自身が一番よく分かっている。

医師は六年間大学で学び、二年間の初期研修を終えて、ようやく医師としてのスタートラインに立つ。その先にも後期研修があり、専門医試験があり、一步步経験を積み重ねていく道がある。私は、その道の途中で、アイドルという世界へ飛び出した人間だ。だから、医師として胸を張れない瞬間がある。もちろん、自分にできることを、自分にできる形で患者さんの役に立ちたいと、必死に働いている。それでも、「もっと医師としてやるべきことがあるのではないか」と言われれば、何も感じないわけではない。同業の目が怖いと思うこともある。

私は、そういう葛藤を抱えない人間ではない。ちゃんと悩むし、ちゃんと怖い。

そして同じことは、アイドルの世界でも起こる。今のアイドルは、中学生や高校生からステージに立つ子も少なくない。その初々しさや若さ、限られた青春の時間そのものが、魅力になる世界だ。そんな中で私は、医者アイドルとしてデビューした時点で二十七歳だった。対バンライブでは、最初は私の色のペンライトを振ってくれていた人が、自己紹介で「医者です」と話した途端、そっとペンライトを下ろしたこともあった。アイドルは、「応援したい」と思ってもらえることが何より大切な仕事だ。

では、医者に対して、人は何を応援するのだろうか。

高学歴。高収入。社会的信用。そんなイメージを持たれやすい職業に、「応援したい」という感情は生まれにくいのかもしれない。そう考えると、世間から見た医者アイドルとは、「医者になったのに、目立ちたくてアイドルをしている人。」そんなふうに映ってしまうのも、極論とは言い切れないのかもしれない。

では、世間が期待する医者アイドルとは何なのだろう。テレビで健康についてコメントをする人。SNS で病気や医療の知識を発信する人。医療を広める存在。きっと、そういう姿なのだと思う。そこに、歌やダンスの上手さは求められていない。社会的な貢献こそが期待されているのだろう。

でも、ここで一つだけ言わせてほしい。

私は、「医者アイドルなら社会の役に立てるから」という理由でアイドルを始めたわけではない。社会的な功績を残したかったからでもない。そんな崇高な理由はない。

やりたかったから。本当に、それだけだった。

アイドルが大好きだった。

歌って踊って、表現することが大好きだった。

その時間で誰かを笑顔にしたかった。

ただ、それだけだった。

その夢を抱いた時、私は医者にも憧れていた。ただ、それだけだった。

今になれば、「医者」という肩書きが武器になることもある。羨ましいと言われることもある。でも現実には、その肩書きがあることで、どちらの世界でも「もう片方」を否定されることの方が多かった。医者として見られれば、アイドルは理解されない。アイドルとして見られれば、医者は色物になる。

そして私は、世間が期待するような「社会貢献を前面に出した医者アイドル」にもなりきれない。私は、歌って踊るアイドルが好きだから。それがやりたいから。

医者アイドルは、私にとって戦略ではない。

不器用で、何度諦めようとしても心から離れない、憧れが連れてきた夢なのだ。

振り返れば、この葛藤は医者になってから始まったものではなかった。

もっと、ずっと前から始まっていた。



図1：筆者の現在のプロフィール写真（筆者提供）

Ⅱ. 朝礼台が私の最初のステージ

私にとって、人生で初めてのアイドルは、朝礼台の上に立ってダンスを教えてくれた小学校六年生のお姉さんだった。

私の小学校の運動会には、「全校表現」という競技とは別に、全校児童と一緒に踊る演目があった。そしてそのダンスを朝礼台の上で踊りながら、全校児童に振り付けを教えてくれる六年生がいた。一年生だった私は、そのお姉さんに夢中になった。

「あそこに立ちたい。」

それが私の最初の夢だった。

五、六年生になると、全校表現係になりその中のオーディションに挑戦し、無事に朝礼台の上で踊る夢を叶えることができた。

歌って、踊って、表現する。

その楽しさを知ってしまった私は、もう元には戻れなかった。

お芝居も大好きだった私は、小学六年生で友人と一緒に演劇部を立ち上げるほど、表現の世界にどっぷり浸かっていた。

その後、私は私立の中高一貫の女子校へ進学し、六年間、音楽部というミュージカルの部活動に所属した。

歌い、踊り、演じる。

私はさらに、表現することの虜になっていった。

転機が訪れたのは、中学三年生の時だった。

友人に誘われ、あるインディーズグループのリリースイベントへ行った。そこで私は、「芸能を仕事にする」という選択肢を初めて知った。同世代の子たちがステージの上で歌い、踊り、お客さんを笑顔にしていた。驚いた。歌やダンスが特別に上手いわけではない。それでも、その場にいる人たちを確実に笑顔にし、幸せにしていた。カッコよかった。会うだけで、姿を見るだけで誰かを元気にできる。

そんなアイドルという存在をテレビ越しではなく目の前で見た衝撃は今でも忘れられない。

「ああ、私はこれを仕事にしたい。」

その日初めて、芸能を仕事にするという夢を持った。

でも、その夢を親に伝えたとき、私の気持ちは最後まで聞いてもらえなかった。返ってきたのは、「無理に決まってるじゃん」その一言だけだった。あの時の母の横顔は今でもよく覚えている。私は何も言えなかった。その考えを覆せるだけの見た目も、歌やダンスや演技の実力も、自信も、特技も、人の目を引くような何かも、あの頃の私には何一つなかった。中学三年生の私でも、それくらいのことは分かった。これは胸にしまっておくしかない夢なんだ。そう思った。

でも、諦めたわけじゃない。いつか叶えるために。誰に何を言われても揺るがない自分であるために。夢を追い続けられるだけの何かを手に入れようと思った。

それが、きっともう一つの憧れであった医師という道だった。

もともとナイチンゲールに憧れ、医療の道にも関心があった。人の役に立てる仕事を自分の強みにできたら、それがきっと、自分を支えてくれる自信になる。

今思えば、とても浅はかだった。身近に医師がいたわけでもない。医師の道がどれほど厳しいものかも、私は知らなかった。医師という肩書きは私が背負うには重すぎる葛藤の始まりでもあった。「医者なのに」「アイドルなのに」とどちらの世界でも問い続けられるようになる未来を、あの頃の私はまだ知らない。それでも、これがあの頃の精一杯の選択だった。

医師への憧れも。アイドルへの憧れも。一度持ってしまったら止められなかった。

なるまでやめられない。

だから、私はその二つとも目指すことにした。

Ⅲ. アイドルを嫌いになる前に

医学生になっても、その夢が消えることはなかった。

浪人時代、私は「自称アイドルキャラ」や「アイドル自己紹介」を予備校で試してみた。すると、案外それがウケた。味をしめ医学部に入学してからも新歓でやり続けた。気づけば、「自称アイドルキャラ」として学年を超えて知られる存在になっていた。そんなある日、ダンス部のOBの先輩から、「HIPHOPやジャズがあるなら、アイドルがあってもいいんじゃない？」そう声をかけてもらった。私は部活のステージで、一人でアイドルをやった。すごくウケた。でも、心のどこかで思っていた。「これは知り合いだから盛り上がってくれているだけなんじゃないか。」私は、自分の実力を知りたかった。

医学生という肩書きを隠したら、私はどこまで通用するのだろう。

そう答えを知りたくて、地下アイドルの世界へ飛び込んだ。

地下アイドル時代。アイドルができるだけでうれしかった。誰かのアイドルになれたことが、本当にうれしかった。しかしそこは、私にとって浪人時代とはまったく違う種類の挫折を味わう場所になった。アイドルがあふれる時代。嘘、裏切り、トラブルの話が絶えない世界。そこで私が出会ったのは、それまでの人生では出会ったことのない価値観だった。私が当たり前だと思ってきた常識は、そこでは当たり前ではなかった。人ではなく、替えのきく商品として扱われること。数字がすべてであること。見える部分の結果がすべてであること。その世界でうまく立ち回れなければ居場所を失うこと。仲間だと思っていた人からも簡単に蹴落とされる。そんな世界だった。

「どうせ将来は医者になるんでしょ。」

「アイドルなんて趣味なんでしょ。」

そんな言葉や視線を同業者から向けられることもあった。アイドルの世界へ飛び込んでも、医学生という事実はどこまでも私についてきた。両立しているということはどちらかが本気ではないということなのだろうか。

初めてアイドルを仕事にできた。自称アイドルではないのだ。誰かにとってのアイドルになれたのだ。それなのに気づけば「誰かを笑顔にしたい」という夢よりも「この世界で生き残ること」が大きくなっていた。それがどんなに小さく劣悪な環境だったとしても、その世界にいとそれが全てになってしまう。あの頃の私は、知らないうちにその世界に飲み込まれていた。結局私は、「飛ぶ」という形で辞めるしかなかった。きちんと筋を通して辞める。それが私にとっては当たり前だった。そんな辞め方はしなくなかった。絶対にしなくなかった。でも、辞めることを受け入れてもらえなかった。望まない契約を結ばされそうになり、私は自分を守るために、その道を選ぶしかなかった。ネットには、「連絡・報告・相談ができない子だった。」「アイドルとしての自覚が足りなかった。」そんな言葉だけが残った。

人生のどん底だった。

懂れて、やっとなれたと思ったアイドル。その夢が、こんな形で終わってしまうのかと思った。そして、何より怖かった。このまま続けていたら、大好きだったアイドルそのものを嫌いになってしまう気がした。

だから私は、自分を守ることを選んだ。

アイドルを嫌いになる前に。

IV. らしさの呪い

でも、私はここで終わらなかった。終われなかった。

もう一度、一から芸能を学び直したい。そう思い、芸能養成所の夜間コースへ通い始めた。入所して間もなく言われたのは、「年齢も考えて、アイドルキャラではなく、自分らしさを見つけなさい。」という言葉だった。私は自分と向き合い続けた。一年間で百個以上の自己PRを書き、何度も自己分析を繰り返した。自分には何があるのか。自分らしさとは何なのか。

養成所では定期的な審査会が行われた。ダンス、歌、演技、自己PR。積み重ねてきたものが評価される場所だった。約七十五人いる中で初回一位。その後も卒業まで常に十位以内という成績を残し卒業公演のミュージカルでは、主役を務めることができた。

少しずつ努力が形になっている気がした。

でも、最後に東京への切符を手にしたメンバーの中に、私の名前はなかった。

理由を聞いた。返ってきたのは、「まいかは、体型だよね……。」その一言だった。今まで積み重ねてきた成績も。努力も。姿勢も。それらは評価されないのだろうか。結局、この世界はそこなのか。そう思った。例えば、医学生タレントとして注目されるなら、求められるのは圧倒的な学力や、美貌のような分かりやすい希少性だった。歌やダンス、演技が評価されるわけではない。

一方で、ミュージカルや演劇では、役として舞台に立つ。そこに「医学生」という肩書きは必要ない。どちらの世界にも居場所はあるようで、どちらにも居場所がない。その現実を、痛いほど思い知った。それでも私は、止まらなかった。いや、止まれなかった。止まったら、どんなに楽だっただろう。よく「賢いね」と言われる。でも、本当に賢い人なら、こんな遠

回りはしないのかもしれない。限られた時間の中で歌やダンス、演技を磨くより、医学生という肩書きをもっと生かす道を選ぶのだろう。私にも、その方が評価されることくらい分かっていた。医学生に、踊れることは求められていない。アイドルに、医学の知識は求められていない。極論を言えば、医学生は踊れなくてもいいし、アイドルは歌って踊れて可愛ければいい。そんなふうに考えたことも、何度もあった。

それでも私は、そのどちらかを選ぶことができなかった。

結局私は、不器用で、夢を追い続けることしかできない人間なのだ。

養成所を卒業した私は、とあるオーディションを受けた。他の人とは違う個性を重んじるオーディションだった。そこでなら私は評価してもらえるのではないかと思った。私はツインテールに白衣をまとい、「アイドル」と「医学生」を全面に押し出して挑んだ。そこで審査員から言われたのは、「キャラと肩書きが一致しない。」「医学生で賢いなら、もっと大人っぽい見た目にした方がいいんじゃない？」という言葉だった。

まただ。

また、私は「医学生」と「アイドル」の間に立たされていた。

どうして、この二つは共存できないのだろう。どうして、どちらかを選ばなければいけないのだろう。どうして「らしさ」に合わせなければいけないのだろう。

きっと、求められていないからなんだ。そう思った。

そして私は、誰かが納得するような新しい可能性を示せてもいない。

それも、分かっている。

V. 見つけてもらえた日

そんなふうに自分らしささえ分からなくなっていた頃だった。私は TikTok という場所で挑戦することにした。

当時はコロナ禍。TikTok は、有名人だけでなく、ごく普通の人が一気に注目を集めることができる場所だった。私は「今日も元気な医学生」という名前でダンス動画を投稿し始めた。無名の学生だった私の動画を見てくれる人が少しずつ増え、「いいね」が増えていくこともうれしかった。でも、本当にうれしかったのは、数字ではなかった。

「ダンスうまい」

「元気が出る」

「楽しそうに踊るね」

「アイドルやった方がいい」

その一言一言が本当にうれしかった。

私自身の表現を見てくれた。そんな気がしたからだ。もしかしたらその言葉の前には「医学生なのに」や「医学生のわりに」という枕詞があったのかもしれない。それでも誰かに認めてもらえたという経験はあの頃の私にほんの少しだけ勇気をくれた。

もちろん、今でも TikTok に苦しむことはたくさんある。数字に振り回される日もある。それでも、あの頃の私を救ってくれた場所だったことだけは間違いない。

そして私は、また葛藤の末に新しい挑戦を選んだ。

関西の小劇場で、女優に挑戦することにした。大学五年生。病院実習の真っ最中だった。どうしてもゲネプロと呼ばれる大切な通し稽古に参加できない。そんな厳しい条件の中でのオーディションだった。だから私は、最初にこう伝えた。

「裏方でも何でもやります。」

舞台に携われるならそれでよかった。

結果として私は、裏方としても舞台を支えながら、本番では、前説と、一言だけセリフのある医師役を演じることになった。稽古では欠席者の代役を務め、毎回違う役を演じた。その経験を評価していただき、次の舞台にも声をかけてもらえた。医学部六年生への進級試験が終わったその日に、セリフと動きを必死に叩き込み、翌日から稽古に参加したことを今でもよく覚えている。

演劇を仕事としたいともがいている人たちと同じ舞台をつくれたことが何よりもうれしかった。でも、その一方で何度も考えてしまうことがあった。

医学生でなかったら。

実習がなかったら。

進級試験がなかったら。

もっと挑戦できたのだろうか。

舞台袖から、そんなことを考える日もあった。

私に与えられる役。私に任せてもらえる仕事。

それはいつも、「医学生でもできる範囲」の中にあった。

それが、私にとって医学生と芸能を両立するということだった。

それでも私は、その制限ごと引き受けながら、表現することだけは諦めたくなかった。

無事に医師国家試験に合格し、私は研修医になった。



図2：白衣・スクラブを着た筆者（筆者提供）

VI. 医者アイドルの誕生

研修医では副業が禁止というルールのもと、継続的な芸能活動はすべてやめ、医業に専念した。不思議なことに、そのルールは少しだけ私を楽にさせてくれた。アイドルを諦めたわけじゃない。今はできないだけ。そう思える理由を、ルールが与えてくれた。そんな研修医の頃、一番つらかったのは、何気ない会話だった。

「何科に興味があるの？」

「将来は何科に進むの？」

医師なら当たり前に関わされる会話。でも、私にとってはその一言一言が苦しかった。もちろん、興味のある診療科はあった。医師として学びたいこともあった。でも、そのたびに胸の奥にしまったままのもう一つの夢が顔を出す。きっと素直に話しても、理解してもらえないことではない。だからその夢だけは心の中にしまったまま答えていた。そしてこのまま進めば、きっとやりがいもあり充実した医師人生が待っている。そう思えた。

でも、その道を選ぶことは、私の中ではもう一つの夢に幕を下ろすことでもあった。

その場所ですれ違う人がいて、やりがいがあって、積み重ねた時間ができたあとで、それを手放すことを、私はきっとできない。私は器用ではない。周りからどう見られるかも気になる。現実を見ることもできる。だから、決められなかった。

医師を選ぶことは、アイドルを諦めること。

アイドルを選ぶということは、医師としてのキャリアを諦めること。

また、どちらかを選ばなければいけなかった。人生は、選択ばかりだ。もう嫌になる。私は、ずっと前から同じことを言っている。

どっちもやりたい。

だから私は、「どちらかを選ぶ」のではなく、「どっちもやるための選択」をしなければならなかった。

医師としての時間は、ちゃんと前へ進んでいた。一方で、アイドルとしての時間は止まったままだった。医師になるまでの間、私は何度も芸能を我慢してきた。

もしかしたら全部「医師になったら」という約束の先送りだったのかもしれない。

もちろん医師という仕事の重さも責任もわかっていた。だからこそ何度も迷った。何度も立ち止まった。それでも、もう抑えられなかった。止まった時間を動かせるのは、自分しかなかった。

私は、もう一度アイドルをしている自分に会いたかった。

ステージで歌って、踊って、その日、その瞬間にしかない景色をみんなと一緒に味わいたかった。それだけだった。でも、その「それだけ」が、ずっと難しかった。だから私は、もう一度挑戦する道を選んだ。アイドルのオーディションを受けた。

それが、医者アイドルが生まれた瞬間だった。



図3：グループアイドル時代の筆者（筆者提供）

VII. 叶ったはずの夢

もともと私は、医学生であることを隠して地下アイドルを始めた人間だ。

だから、「医者」をブランドにすることには、ずっと葛藤があった。今でさえ自己紹介では、「昨日は医者！今日はアイドル！年中無休のあなたの主治医、まいかび先生です！」と言っている。でも実は、この自己紹介は、私が考えた候補の中では最後まで一番好きではなかったものだ。

医者という肩書きを使うということ。それがどれほど難しく、自分を苦しめるものなのかを、私はそれまでの人生で嫌というほど知っていた。

それでも、アイドルがあふれる時代の中で、自分という存在を知ってもらうためには、その肩書きを使わないという選択肢はなかった。あの頃、医師を目指した理由と、医者という肩書きを使う理由は、もう同じではなくなっていた。まずは私を見つけてもらうこと。そして、その先でアイドルとしての私を知ってもらうこと。

そのために、自分にできることは全部やろう。あの頃の私は、そう覚悟を決めていた。

ただ、その選択が、この先何年も私自身を悩ませ続けることになるとは、その時はまだ思ってもいなかった。

活動を続ける中で、医師としての仕事や個人でのメディア出演も少しずつ増えていった。正直に言えば、うれしかった。

見つけてもらえることは、アイドルにとって何よりもうれしいことだから。でも、その喜びと同じくらい、不安もあった。メンバーは、どう思っていたのだろう。グループとしても

っと大きくなりたかった。そのために、自分にしかないものがあるなら使いたかった。医者という肩書きも、その一つだった。

ただ、その肩書きは私だけのものだった。だから時々、本当にこれがグループのためになっているのだろうか、と立ち止まることがあった。

もしかしたら、全部私の考えすぎだったのかもしれない。誰もそんなことは気にしていなかったのかもしれない。でも、私は考えてしまう。「もっと自分のことだけ考えればいい。」「芸能なんだから、もっとがめつくてもいい。」そう言われたこともある。きっと、その通りなのだろう。

でも、それができない。私は、そういう人間だった。
自分の心の奥に、ずっと重たいものをしまい込んでいた。
その感情に名前がつくのは、もう少し先のことだった。

私は二つの夢を持ってしまった。

そして、その二つの夢は叶ったのだ。

医者も。アイドルも。

でも、医者として、アイドルとしての夢はまだ叶っていない。

本当の葛藤は、ここから始まった。



図4：ライブ中の筆者（筆者提供）

Ⅷ. 前例のない孤独

これまで私は、何度「肩書き」という言葉を使ってきただろう。それは武器なのか。個性なのか。希少性なのか。それとも、ただの肩書きなのか。私は、その言葉に何度も向き合い、何度も苦しんできた。

医者アイドルとは何なのか。

私は何者なのか。何を歌えばいいのか。どんな衣装を着ればいいのか。どんな発信をすればいいのか。医療を伝える人なのか。子ども向けなのか。かわいいのか。面白いのか。そして、「応援したい」と思ってもらえるのだろうか。私は、ファンの人に何を届けることができるのだろうか。

何度も考えた。何度も立ち止まった。そのたびに、誰かに聞いたかった。「どうしたらいいですか。」でも、聞ける人がいなかった。私の前を歩いている人が、誰もいなかったからだ。前例がない。その言葉は、どこか格好よく聞こえる。でも、本当は違う。

前例がないということは、正解を知っている人が誰もいないということだった。

そして、それは正解が存在しないということでもあった。

だから私は、何度もブランドに悩み、何度も自分らしさに悩み「私は何者なのだろう」と立ち止まった。今でも、その答えは分からない。

あの頃の私は、医者になれば夢を追いつける自信になると思っていた。人の役に立てる仕事が、自分を支えてくれると思っていた。そして、心のどこかでは、医者という肩書きがあれば、芸能の世界でも私を見てもらえるのではないかと考えていたのかもしれない。今となっては、それが本当だったのかは分からない。ただ、一つだけ確かなことがある。

あの頃の私は、本気で医者にも憧れ、本気でアイドルにも憧れていた。

私は「医者アイドル」という肩書きから抜け出したいのではなかった。肩書きで説明される存在のまま終わりがたくなかったのだ。本当は、ただのアイドルとして見てほしかった。歌って、踊って、笑って、誰かを元気にする。そんな一人のアイドルとして。

でも、その入口は、医者という肩書きだった。

だから私は、その肩書きを背負うことを選んだ。

矛盾している。ずっと矛盾している。

でも、その矛盾ごと抱えて生きるしか、私にはできなかった。

それでも私は、医者アイドルを名乗る。

まだ何ができるのかは分からない。でも、探し続けたい。私にしかできないアイドルの形を。そしていつか、「医者アイドル」というジャンルではなく、「まいかび」という一人のアイドルとして見てもらいたい。

その願いを抱き続けるということは、きっと、この先も前例のない孤独と向き合い続けるということなのだろう。

それでもいい。

私は、憧れが連れてきたこの二つの夢を愛する。
不器用でもいい。
何度諦めようとしても、心から離れなかった夢だから。
きっとこの先も迷う。きっとこの先も孤独だ。
それでも私は、愛してみせる。



図5：筆者の生誕祭ライブ時のフラワースタンド（筆者提供）